

第1回 女子美ベルリン賞報告書

氏名 杉崎 浩美



杉崎 浩美

1993年生まれ

神奈川県横浜市出身

女子美術大学在学中に錆の魅力を感じ、以来錆をテーマに様々な表現方法を用いての研究・制作活動を行なっている。

<略歴>

2013年 女子美術大学 芸術学部 デザイン工芸学科 ヴィジュアルデザイン専攻 入学

2015年 フランス パリ・セルジー国立高等美術学校へ協定留学

2017年 女子美術大学 芸術学部 デザイン工芸学科 ヴィジュアルデザイン専攻 卒業

<展覧会歴>

2017年3月 2016年度ヴィジュアルデザイン専攻卒業制作有志展 東京 東京デザインセンター

2018年3月 JART_8TH ニューヨーク WAHセンター

2018年7月 侘錆 Wabi,Sabi ベルリン クンストラウム・クロイツベルク/ベタニエン

<受賞歴>

2017年3月 2016年度ヴィジュアルデザイン専攻卒業制作賞 受賞

2018年5月 第一回女子美ベルリン賞 受賞

1. 「クストラウム・クロイツベルク/ベタニエン」滞在の動機・目的

”海外のART”と”日本の芸術”に対する概念の相違点を研究し理解を深めることが、海外でアーティスト活動を行うために必要必要不可欠である”柔軟な視点”を得ることに繋がると考え、滞在を志望した。

難しく言ってしまうとこのような動機だが、例に出して言うと、芸術を勉強している人もそうでない人も、誰もが感じたことのある疑問ではないかを感じる。

海外アーティストの作品は、日本の美術館やアートイベントなどでも数多く展示され目にする機会はあるが、「こんなの私でも作れそう(描けそう)」「こんなのが高額で売れちゃうんだ」という声がある一方で「すごいリアル!」「私には絶対作れない(描けない)」という称賛の声もある。

なぜ、前者の作品が世間で評価されているのか。

後者の作品に関しては、どの点を評価をしているのか。

この両者の作品の捉われ方の違いに疑問を抱いた時に、海外と日本の芸術に対する概念が違うことに気が付いた。

以下は私の自論であるが、日本と海外の芸術の違いをまとめたものだ。

<日本での芸術の捉え方>

- ・第一に技術が求められ、作品の良さは見た目から伝わるものである。
- ・繊細さや手仕事の綺麗さが好まれている。
- ・完全に仕上げられた状態から、その作品がいかに優れているか評価される。
- ・代表的な日本の芸術:伝統工芸

<海外でのARTの捉え方>

- ・個人の思想やコンセプトが第一で、作品の良さはいかにコンセプトが反映され、表現されているかどうかである。
- ・大胆さや奇抜さ、または一見汚いような作品が好まれる。
- ・未完成品でも、その作品がその形態になるまでにどのような過程があったのかというところが評価される。
- ・代表的な世界のART:現代アート

このような違いがどこから生まれるのか、国民性や歴史、宗教、教育など様々な要因がかかわっているからではないだろうかと考えを巡らせた時に、アーティストとして制作活動を続けていくために、作品を生み出す過程においてもっと深い部分を追求したいという探究心が芽生えた。

大学一年目の時、初めてそのような感情を抱き、三年目で協定留学先のパリへ留学を経験した。

現地の学生達と共に実技や講義を受けたことで、日本と世界の芸術の概念の違いが確立され、探究心はさらに膨らみ、その経験がのちの大学生活での制作に大きな影響を与えることになった。

今回、初めて訪れるドイツ・ベルリンへの滞在でさらなる芸術の価値観の研究をすることと、今後海外で活動するアーティストになる為の土台を築くことを目標とした。

2. 制作・研究活動

一ヶ月という限られた滞在期間の中で、ベルリンのカルチャーシーンを知ることや人と出会い交流を持つことが目的だったため、制作よりも調査がメインになった。

<滞在中のスケジュール>

7/3 ベルリン着

7/4～13 リサーチ

ベルリン市内の美術館、博物館や開催中のベルリンビエンナーレを訪れた

7/14 ポツダムを訪問

7/15 ザクセンハウゼンを訪問

7/16～25 インタビュー

現地で知り合ったアーティストを含む方々にベルリンでの生活や、制作活動について聞いた

7/26～28 チェコ、フランクフルトを訪問

7/29.30 オープンスタジオ準備

7/31 オープンスタジオ

8/1 ベルリン発、帰国

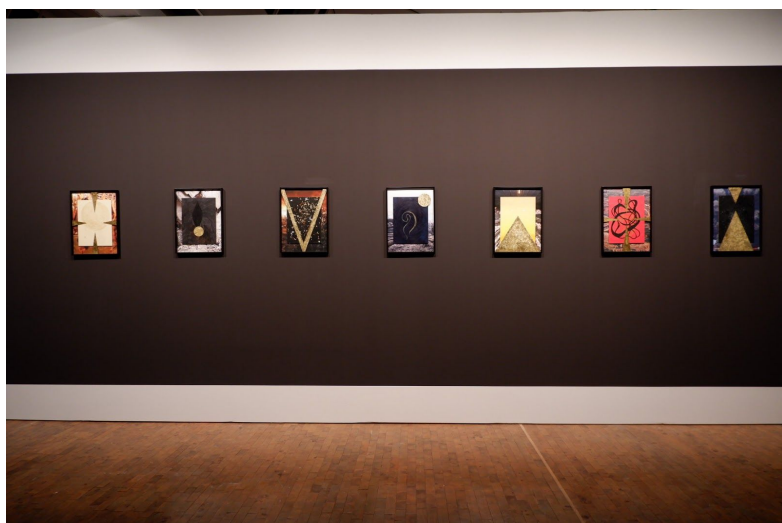
<調査内容>

- ・現地で暮らしている方に、どのような経緯でこの場所を拠点にして生活することになったのか
- ・日本人アーティストの方に、日本での制作との違いはなにか
- ・日本のアートについてどう思うか、また自分の作品についてどう言われるか
- ・移民の方に、移り住んだ当初の話
- ・ベルリンの壁崩壊前にベルリンに移住した方の話

など、ご縁がありたくさんの方と出会いお話を伺う機会があった。

<ベルリンの展覧会の様子>

2年に一度開催される現代アートの展覧会がちょうど滞在中に重なっていたので訪問した。



最も興味深かった展示が、ヘルムート・ニュートン写真美術館と映画美術館だった。



<ベルリン市内のアーティストレジデンス見学>

ベルリンで出会ったカメラマンの方が契約しているアーティストレジデンスへ見学に行った。







月50ユーロ(日本円で約6500円)で、写真とスクリーンプリントの工房があり、展示場所となるスタジオをレンタルすることができる。インクや備品も使い放題。
余った分はレジデンス内の工房の備品やビール代になる。

<ベタニエン内の工房について>

ベタニエンの施設内にはシルクスクリーンと大判プリントの工房があった。
今回5月の末に受賞が決まり一か月後には渡独というスケジュールだったため、事前に予約ができず、現地に到着した日にシルクスクリーン工房のスタッフに交渉したところ、キャンセルが出れば使用できるとのことだったが、残念ながら滞在期間中にキャンセル待ちの連絡が来ることはなかった。
また、大判プリントについても同じで、数ヶ月前から予約をしておく必要がある。

ベタニエンに滞在する中で、工房の利用方法については今後の課題になるだろう。

<チェコ、フランクフルト訪問の様子>

チェコでは、現地の美術大学に通う知人アーティストに会いに、またユダヤ建築や西洋建築など様々な建築物が混在する街並みを見るために訪れた。



カフカの小道



チェコの現代美術館DOXに新しくできた飛行船の展示

フランクフルトでは、市内の三つの現代美術館の無料開放日だったことと、ドイツの他の都市がベルリンとどのような違いがあるかを研究するために訪れた。



金融街なので、東京のような高層ビルと木組みの建物が混在していた。
〈ベタニエン周辺の様子〉



大きな公園内に施設があり、緑に囲まれていた。
裏側には川が流れていて、夏場限定の野外シネマも設置されていた。



公園の中にある教会

毎週日曜日に行われるミサに参加した。





ベタニエンのあるクロイツベルクは旧東ベルリンなので、治安がいい方ではないし、街並みはとにかくストリートアートで溢れかえりごちゃごちゃしている。

また、ベタニエンのすぐ隣にはホームレスの集落や、浮浪者が勝手に住み着いているアパートがあり、かなりアンダーグラウンドな雰囲気が漂っていた。しかし、夜遅くに出歩いても変に声をかけられたり襲われたりということはなく、皆パーソナルスペースを保ち自由に生活を送っているという印象だった。

ベタニエンの施設内も街中と同じように落書きがされ放題だった。

元々病院だったということもあり、部屋や廊下は白くて無機質な雰囲気だった。



<オープンアトリエ>

タイトル:侘 寂

7/31 12:00~21:00

Room139 Tokyo Arts and Space



コンセプト:

日本特有の美意識である”わびさび”に影響を受け、錆を素材として使用し制作活動をしている。

”さび”とは、古びたものから感じられる美しさのこと

”わび”とは、不足しているものから感じられる美しさのこと

西洋の美意識は、古くから華やかなもの、対照的なもの、人工的なものが持つ美しさを中心であることにに対し、日本の美意識は、自然なものや朽ちていくものの静けさ、外見にはない美しさを中心にあった。

この美意識を表した言葉が”わびさび”である。

言葉で説明することが非常に難しく、曖昧なものであるが、とても日本らしく深みのあるこの言葉と、その心を大切にしていきたい。



展示風景



当日は、現地で出会った方やたまたま立ち寄った方も合わせて12組の方に来場して頂いた。



〈そよぐ〉

空間作品 3000 × 1900mm

布、錆染

錆で染めた布を細かく裂き、それらを配置した作品。

自然豊かな環境にあるスタジオで、風にそよぐ様子が綺麗だったので窓際に設置した。



〈まとう〉

映像作品 2分30秒

錆で染めた布で衣服を制作し、それを纏う様子を映像にしたもの。

3. 結び

たったの一カ月、されど一カ月のあっという間に過ぎ去った一ヶ月間だった。

期間はどうかあれ、新しい国を訪れるたびにカルチャーショックを受け、その経験が制作のモチベーションに繋がるので、今回ベルリンのアーティストレジデンスに滞在するという貴重な経験ができて本当によかった。

滞在を終えて、心境の変化としては今後海外で活動するのであれば、ベルリンを拠点に制作活動をしていきたいと強く感じたことだ。

私がアート留学として訪れたパリ、ニューヨーク、ベルリンの三都市の中でも、ベルリンは特に製作環境に恵まれているのではないかと感じたからである。

・時代背景によりヨーロッパ諸国の都市の中でも物価がかなり安く、移民が多い

↓

・新しいものを受け入れる体制が整っているため、エネルギッシュで挑戦的な若者が多く集う

↓

・クラブカルチャーやヒッピーなどの独自の文化が生まれ、もちろんアートシーンにもそれが反映されている

↓

・様々な要因によって新しいもの、古いものが混在していてベルリンというヨーロッパの他の都市とは全く異なる唯一無二の街が出来上がっている

何よりアーティストにとって重要である物価が安いということが一番の理由だ。

日本の芸術と世界のARTの概念の相違点を研究することは、今後もアーティストとしての制作活動における指針になるだろう。

最後に、滞在中一番印象に残ったことが、現地で出会った全ての人がベルリンの自由さを愛していることだった。

それは街中の落書きであったり、夜中でも鳴り響いている音楽であったり、ベルリンで起こる出来事全てにこれがベルリンだから。という一言で片付けられる大らかさを持っているのだ。

今後もこの街から新しいことが次々と生まれることを楽しみに、再び訪れる機会を願いたい。